毎日の福祉

公益財団法人
毎日新聞東京社会事業団
〒100-8051 東京都千代田区一ツ橋1-1-1　TEL03-3213-2674
発行人:渡部　聡　ホームページ http://www.mainichi.co.jp/shakaijigyo/

震度7の「前震」で倒壊した家屋から奇跡的に救出された女児＝熊本県益城町で

崩落した阿蘇大橋＝熊本県南阿蘇村で本社機から

被災者に寄り添う

この1年間も国内外で、大きな自然災害が発生しました。当事業団は、各地の災害被災者の支援のため、毎日新聞と連動して、救援金のご寄付を呼びかけました。

熊本地震救援金 1億6300万円を寄託

2016年4月、観測史上初めて最大震度7を2回記録し、その後も強い余震が続いた熊本地震が発生。50人が直接死し、関連死も熊本･大分で170人を数え、建物やインフラにも甚大な被害を与えました。毎日新聞社と毎日新聞東京･大阪･西部の3社会事業団は、ただちに救援金の受け付けを開始しました。

全国から3事業団に寄せられた救援金から、5月末に第1次贈呈分として7000万円を熊本県、大分県、日本赤十字社熊本県支部、現地で救援活動をするNGO4団体に、8月に第2次贈呈分8500万円を熊本県に寄託しました。発生から1年を迎えた17年4月には、第3次贈呈分800万円を熊本県と日本赤十字社熊本県支部に寄託し、これまでの贈呈総額は1億6300万円となっています。

温かいご支援をいただいた多くの皆さまに心より感謝し、引き続きのご協力をお願い申し上げます。

家屋付近を調べる特別救助班＝熊本県益城町で

都市対抗野球大会の会場でも復興支援、駆けつけたくまモン＝東京ドームで

イタリア地震救援金 132万円を贈呈

2016年8月24日未明、イタリア中部で290人を超える死者を出すマグニチュード6･2の地震が発生しました。

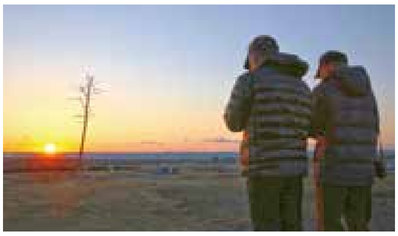
毎日新聞社と東京･大阪･西部の3社会事業団の呼びかけで全国から集まった109件132万4186円の救援金を全額イタリア大使館に贈呈し、イタリア大使からの礼状が毎日新聞社に届いています。

一夜明け、重機でがれきを撤去する＝イタリア中部アマトリーチェで

災害救援金にご協力いただきました皆様にあつくお礼申し上げます。

東日本大震災救援金、2016年度は850万円を贈呈

死者1万5893人、行方不明者2556人（警察庁、16年12月）の犠牲を数えた東


福島県南相馬市鹿島区で

日本大震災は2017年3月で発生から6年が経過し、各地で追悼の祈りが捧げられました。復興庁によれば震災関連死者も3500人を超え、今も全国で約11万9000人が避難生活を余儀なくされています。（17年3月現在）

2016年度は皆さまから東京・大阪・西部3社会事業団にご寄付いただいた、東

取手市藤代で

日本大震災救援金850万円を、日本赤十字社を通じて被災地に贈呈しました。これまでの贈呈総額は11億2640万256円となりました。

【当事業団では救援金を17年度も受け付けます。引き続きのご支援をよろしくお願いいたします】

毎日希望奨学金 16年度は192人に支給

毎日新聞社と毎日新聞東京・大阪・西部社会事業団が、東日本大震災で保護者を亡くした生徒や学生を支援する「毎日希望奨学金」は、2016年度も新規支給者54人を含め192人に給付されました。

学校別では高校・高専生109人、短大・大学生66人、専修学校生17人です。

発生から2カ月後の11年5月に創設された奨学金ですが、趣旨に賛同いただいた読者や団体からの寄付をもとに運営され、これまでに延べ1205人の生徒や学生に月額2万円を給付してまいりました。引き続き募金にご協力をお願いします。

ご寄付の方法

◇毎日希望奨学金

■郵便振替　毎日新聞東京社会事業団（00120･0･76498）。「奨学金」と明記してください。

■現金書留　〒100-8051　東京都千代田区一ツ橋1の1の1、毎日新聞東京社会事業団「奨学金」係。

■銀行振り込み　三菱東京UFJ銀行東京営業部（普通0422292）。

口座名は「毎日新聞東京社会事業団希望奨学金」。

※振込手数料はご負担願います。毎日新聞の地域面で紹介しますので、匿名をご希望の方は「匿名希望」と明記してください。銀行振り込みの方で領収書や紙面掲載をご希望の方は、その旨を明記し住所、氏名、電話番号を書き、振込用紙の写しを添えて郵送かファクス（03･3213･6744）で当事業団へお送りください。

震災遺児支援 3つのコンサート

2017年3月には、毎日新聞社が主催する3つのチャリティーコンサートが震災遺児を支援するために開催されました。

8日、シンガー・ソングライターの南こうせつさんと伊勢正三さんによるフォークユニット「ひめ風」が、「おまえが大きくなった時～震災遺児のために～」と題した公演を東京・渋谷の Bunkamura オーチャードホールで行いました。二人は「22才の別れ」や「神田川」など往年のヒット曲を歌い、クリス・ハートさん

も加わり会場を盛り上げました。

14日には、オペラ界の花形男性歌手5人が東京・初台の東京オペラシティで「藤

原歌劇団トップ・テナーズ2017」を開催。村上敏明さんら藤原歌劇団所属のテノール歌手がオペラ・アリアをはじめ、「会津磐梯山」などを披露し美声を響かせました。

震災発生から毎年続く「がんばろう日本！スーパーオーケストラ」も、24日、東京オペラシティコンサートホールで、全国から集結した演奏家有志72人により開催され、今年も楽団の壁を超えた一夜限りの協演が実現しました。7回目の今回は、全曲ベートーベンプログラム。海老原光さんが指揮し、仲道郁代さんがソリストを務めたピアノ協奏曲第5番「皇帝」に大きな拍手が起きました。

出演メンバーはフィナーレでは客席の歌声とともに恒例の「ふるさと」を全員で演奏し、終演後はロビーに立って来場者に募金を呼びかけました。

（撮影・徳永三城）

小児がん征圧キャンペーン

第21次は1290万円を27団体に

小児がんは15歳以下で発病した白血病、脳腫瘍、神経芽腫、悪性リンパ腫、腎腫瘍などの「がん」の総称です。わが国では毎年およそ2000人の子どもが小児がんと診断され、現在約1万6000人が病と闘っています。

2016年度は毎日新聞の小児がん征圧キャンペーン「生きる」も20周年を迎え、多くの募金が東京・大阪・西部事業団に寄せられました。16年度「第21次小児がん征圧募金」1290万円を、小児がんの子どもへの支援や研究に取り組む全国27団体に贈呈しました。1996年に毎日新聞社と3社会事業団がこのキャンペーンを開始して以来これまでに贈呈した総額は3億1390万円になりました。

第21次分贈呈先（順不同）

がんの子どもを守る会▽難病のこども支援全国ネットワーク▽スマイルオブキッズ▽ファミリーハウス▽メイク・ア・ウィッシュ　オブ　ジャパン▽白血病研究基金を育てる会▽そらぷちキッズキャンプ▽パンダハウスを育てる会▽小児脳腫瘍の会▽アジア・チャイルドケア・リーグ▽ゴールドリボン・ネットワーク▽チャイルド・ケモ・ハウス▽日本クリニクラウン協会▽近畿小児血液・がん研究会▽京都大学医学部付属病院小児科ボランティアグループ「にこにこトマト」▽京都ファミリーハウス▽あいち骨髄バンクを支援する会▽守口ぶどうのいえ▽こどものホスピスプロジェクトTSURUMIこどもホスピス▽Japan Hair Donation ＆ Charity▽にこスマ九州▽久留米大学病院親の会「木曜会」▽九州大学病院小児医療センター親の会「すまいる」▽たんぽぽハウス（熊本）▽九州がんセンター小児科親の会「大きな木」▽福岡大学病院小児科親の会「みらい」▽宮崎大学医学部小児がんキャンプ実行委員会

20周年迎え支援のコンサート続く

キャンペーン20周年を迎えた2016年度には、難病と闘う子どもたちを支援するコンサートが相次ぎました。

世界的バイオリニスト、川畠成道さんが5月29日、「グランドファミリーコンサート2016」（毎日新聞社後援）を東京都千代田区の紀尾井ホールで開き、小児がんを経験した子どもや家族ら約50人を「がんの子どもを守る会」を通じて招きました。

この日は国内外で活躍するピアニスト、佐藤勝重さんとの共演で約500人の聴衆を魅了しました。

チャリティーコンサート「生きる2016～小児がんなど病気と闘う子どもたちとともに～森山良子with FRIENDS」（毎日新聞社主催）が7月6日、東京都渋谷区のBunkamuraオーチャードホールで開かれました。

12回目の開催となった今回、ゲストの谷村新司さんは自ら作詞作曲した「いい日旅立ち」を森山さんと一緒に歌い、会場を沸かせました。特別出演の由紀さおりさんや、トランペッターのエリック・ミヤシロさん率いるEM.Band、フリューゲルホルンのTOKUさん、ヒップホップ・アクティビストのZeebraさんらゲストの歌声と演奏も観客を大いに盛り上げ、がん患者だった子どもたちや家族ら客席を埋めた約1800人がステージを楽しみました。

また、この日は天皇、皇后両陛下もコンサートを鑑賞されました。お二人が会場に入られると、観客は総立ちとなり大きな拍手がわき起こりました。小児がんを経験した子どもたちも両手を大きく振り、両陛下も手を振って応えていらっしゃいました。

「クラシック・ヨコハマ　生きる～2017 New Year若い命を支えるコンサート」が1月15日、横浜市西区の横浜みなとみらいホールで開かれ、美しいハーモニーが約1900人の聴衆を魅了しました。

港町・横浜の冬を彩る音楽祭は今年10回目。今回は渡邊一正さんが指揮する東京フィルハーモニー交響楽団をバックに、新鋭のピアニスト反田恭平さんがショパンの協奏曲を、日本を代表するチェリストの堤剛さんがドボルザークの協奏曲をそれぞれ演奏しました。

客席には小児がんの子どもや家族ら約50人が招待され、終演後には楽屋で出演者たちとの交流も楽しみました。

16年度も5団体に―いのちの輝き毎日奨励賞

難病の子ども支援全国ネットワークが主催する「いのちの輝き毎日奨励賞」は、小児がん制圧募金の助成金を基に、小児がん以外の難病に関連する団体に贈られています。

16年度も15団体の応募があり、厳正な選考の結果、「特定非営利活動法人ポムハウス」、「いわて全国心臓病の子どもを守る会」、「全国色素性乾皮症（XP）連絡会」、「1q部分重複症候群患者家族会」、「余暇活動支援グループ　スキップ♪」の5団体が選ばれ、8月24日の贈呈式で、各20万円が贈られました。

表彰式での審査委員と各団体代表者

海外難民 救援キャンペーン

16年度は960万円を贈呈

皆さまから寄せられた2016年度海外難民救援金960万円を、国連救援機関や難民支援活動をしているNGO（非政府組織）など23団体に贈呈しました。

毎日新聞社と毎日新聞東京・大阪・西部社会事業団が海外飢餓・難民キャンペーンを始めた1979年以来、これまでに贈呈した救援金は16億1463万8344円になりました。

熱砂のかなたに～ヨルダンのシリア難民～

2016年度の毎日新聞紙上での海外キャンペーンは、中東ヨルダンに取材陣（文・津久井達、写真・久保玲）を派遣し、隣国に逃れて暮らすシリア難民の生活を報告しました。

ヨルダンの首都アンマンから車で東に約1時間、アズラック難民キャンプで約3万6千人のシリア難民が暮らす。難民はIS（過激派組織・イスラム国）との無関係を警察当局が確認するまで移動を禁じられる。空爆が続くアレッポから逃れ、3年前に出稼ぎでアンマンに出た夫を追ってきたサーミア・アルアリさん（37）と長男アマールちゃん（4）。「アンマンで早く夫と暮らしたいのに、いつになったら許可が下りるの」

アズラック難民キャンプで暮らすゼイナブ・アリちゃん（4）。背骨がS字にゆがみ、左足が内側に曲がる障害を持って生まれた。キャンプの病院で「早くアンマンで治療を受けた方がよい」と助言され、キャンプを出る許可申請を3カ月前にしたが、なぜか手続きは進んでいない。「お父さん、私の足が治るようにお祈りしてくれますか」

「国境なき医師団」が運営するアンマンの病院でリハビリ中のムハンマド・リマールちゃん（8）。シリアで突然の空爆に会い兄ワリードさん（当時14歳）を亡くし、自らは左脚を骨折した。故郷では毎日ボールを蹴りながら通学し、兄とサッカーで遊ぶのが好きだった。「昔のようにサッカーができるようになるの?」

シリア南西部ダルアーで戦車の砲弾を受け右脚を失ったアブドゥルサラーム・アルハリーリさん（19）。180㎝を超える長身、地元のサッカークラブチームでミッドフィールダーとしてプレーしていた。アンマンの病院で、義足の陸上競技アスリートが活躍する動画を見て「僕もスポーツ用の義足が欲しい。いつか挑戦してみたい」

2016年度 海外難民救援金贈呈団体（順不同）

団体	活動
日本ユニセフ協会	すべての子どもたちが健康に、平和な世界で暮らせるようにと政治危機や紛争などで苦難を強いられている人々、とりわけ女性と子供に対して医療、食糧などの支援や教育の普及支援を実施している。
国連UNHCR協会	世界では3千万人が難民や国内避難民になり、困難な生活を強いられている。こうした難民を保護し、食糧支援、自立支援や子供の教育支援をしている。
国連世界食糧計画WFP協会	世界ではおよそ8億4200万人（9人に1人）が飢餓に苦しんでいる。飢餓をなくすため、毎年平均 80カ国以上で9000万人以上に食糧支援を続け、毎年2,000万人以上の子どもたちに学校給食を提供している。
国境なき医師団	紛争、自然災害、難民、感染症の流行などに対して医療・人道援助を行う民間非営利の国際団体。アフリカ、アジア、南米など途上国中心に世界中で活動。
AMDA	世界各地の自然災害発生地で緊急医療活動をしている。ネパール子ども病院への医師・看護師の派遣、医薬品、医療機器の支援をしている。
シェア（国際保健協力市民の会）	タイ東北部のケマラートでエイズの予防教育やキャンペーンを展開。差別と偏見のない村づくり活動を進めている。
JEN	スーダンやアフガニスタンなど紛争や自然災害で厳しい状況にある地域で給水設備や衛生施設、学校の建設に取り組んでいる。
シャンティ国際ボランティア会	カンボジアやタイで子どもたちに対する人材育成活動や学校建設活動に取り組んでいる。
AAR（難民を助ける会）	カンボジアやアンゴラ、スーダンなどで未だに埋まっている地雷の除去や地雷回避教育、地域保健医療に取り組んでいる。
JVC（日本国際ボランティアセンター）	パレスチナやスーダンなどで医療、食糧支援活動を実施。ラオスや南アフリカなどでは自然農業による地域開発を支援している。
ピースウィンズ・ジャパン	アフガニスタン北部の干ばつ地域で飲料水や農業用水の確保、水資源の管理・活用のための調査活動をしている。
緑のサヘル	アフリカ・チャドとブルキナファソで緑が急速に失われている地域の砂漠化防止のための植林事業を実施し、住民が定住できる環境づくりに取り組んでいる。
ワールド・ビジョン・ジャパン	アジアやアフリカで性的搾取を受けたり、危険な場所で働き、路上生活をする子どもたち、障害のために差別される子どもたち、難民キャンプで暮らす子どもたちへの支援活動をしている。
難民支援協会	様々な理由から自分の生命を守るために自国から避難して日本にのがれて来た人々のための支援活動をしている。
マハムニ母子寮関西連絡所	独立後間もないバングラデシュで日本人僧侶により生活に苦しむ未亡人と子どもたちの生活・就学支援の母子寮が作られた。現在も約100人の子どもが生活し、学校に通っている。
シエラレオネフレンズ	アフリカ・シエラレオネにおいて、将来を担う子どもたちへの学校教育や給食を支援している。
ネパール・ヨードを支える会	ネパール・ヒマラヤ山麓の農村地帯の風土病である「ヨード欠乏症」対策に取り組む。
ネパール震災プリタム実行委員会	神戸在住のネパール人ダンス指導者プリタム・ラマ・ゴレさんを中心に、ネパール地震被災者への支援物資配布や震災遺児への学資支援を続ける。
日本国際民間協力会	アジア、中東、アフリカの世界21カ国で、途上国の人々の経済的・精神的な自立を図るため緊急災害支援、環境に配慮した自立支援、人材育成に取り組む。
アジア協会アジア友の会	水の供給事業を中心に、アジア18カ国68地域の現地NGOと提携して、生活や環境、医療や衛生、教育の向上など社会的課題に取り組んでいる。
ラリグラス・ジャパン	ネパールとインドの少女売買春・人身売買の廃絶を提唱し、HIV感染者・AIDS発症者の支援や、障害をもつ女性や子どもをサポートする国際協力NGO。
ペシャワール会	パキスタンとアフガニスタンに診療所を開設し、アフガニスタン難民に医療支援を実施。緑化事業として灌漑用水路の建設や井戸の掘削に取り組んでいる。
ロシナンテス	スーダンで、医療活動、学校・教育事業、水・衛生事業、交流事業、スポーツ事業に取り組んでいる。

夏と冬二つのキャンプ

毎日新聞東京社会事業団は、手足の不自由な子どもたちを対象に、毎年夏と冬にキャンプを開催しています。

2016年8月14日から19日までの5泊6日の日程で、「第60回　手足の不自由な子どものキャンプ」（当事業団、日本肢体不自由児協会、東京YMCA主催）が、山梨県山中湖村の東京YMCA山中湖センターで開催されました。

また17年1月7日から9日まで「第28回　雪と遊ぼう！親と子の療育キャンプ」（当事業団、日本肢体不自由児協会など主催、新潟県南魚沼市後援）が、南魚沼市の八海山麓スキー場で開催されました。二つのキャンプを支えてくださった多くの皆さまに心より感謝いたします。

自然と交流 集団生活にチャレンジ

「手足の不自由な子どものキャンプ」には、障害を持つ小学3年生から高校3年生までのキャンパー33人と、学生や社会人のボランティアスタッフ、医師、看護師ら総勢約100人が参加しました。

ひと夏のキャンプ経験は、子どもたちだけでなく、ボランティアスタッフ含め、参加者全員を成長させます。

ビッグカヌーに乗り込み「さあ出発」

富士山をバックに朝のお散歩は気持ちいい

手作りの網とかごで虫取り大会だ

みんなの力でキャンプ大成功

すごく盛り上がったティーボール大会

ハンモックでのお昼寝にも挑戦

憧れの銀世界にはじける笑顔

「雪と遊ぼう！親と子の療育キャンプ」には、首都圏在住の児童17人と保護者、ボランティア、医師など総勢85人が参加しました。

子どもたちが雪の世界を楽しめるだけでなく、保護者の皆さんも医師ら専門家や他の参加者と交流し、療育について語り合える場となっていることがこのキャンプの特徴です。

そりで一気に滑り降り
スピード感に大はしゃぎ

お兄さんといっしょなら
高いリフトも怖くない

みんなでついたおもちの味は格別です

忘れたくない雪景色　みんな笑顔の記念撮影

第46回 毎日社会福祉顕彰

福祉の向上に尽くした個人、団体を顕彰する2016年度の第46回毎日社会福祉顕彰（主催＝毎日新聞東京・大阪・西部社会事業団、後援＝厚生労働省・全国社会福祉協議会）は、過去最多に並ぶ43件の推薦が寄せられ、審査の結果、以下の3件（2団体、1個人）に贈られました。10月21日（金）に東京都千代田区で開催された贈呈式で、受賞者に賞牌（しょうはい）と賞金（各100万円）が贈られました。

公益社団法人「青少年健康センター」

（斎藤友紀雄会長（80）＝東京都文京区）

◇ひきこもりの支えに　不登校やひきこもりの若者と家族を支えようと1985年、精神医学や心理学の専門家らで設立。3年後に居場所となるデイケア施設を設置した。斎藤さんは2004年に会長に就任。「いのちの電話」の活動経験を生かした自殺予防の電話相談「クリニック絆」も開設している。自治体から受託する、若者の社会参加応援事業も増えており「各方面から期待されている。専門スタッフの養成に力を入れたい」と話す。

家常恵さん（78）

（元大阪府中央子ども家庭センター所長＝大阪府大東市）

◇虐待から守って55年　55年以上、子どもを虐待から守る活動を続ける。大阪府内の児童相談所長を歴任し、虐待を受けた子どもの保護に尽力してきた。集団で子どもを取り返しに来たオウム真理教の信者や暴力団員の親とも決然と対応。定年退職後の2003年、児相や養護施設、医療機関関係者らと「大阪子どもネットワーク」を全国に先駆けて作った。「子どもの命を守る最後のとりでとして、虐待の発見や防止に力を注ぎたい」と話す。

特定非営利活動法人「地域活動支援センターおおぞら」

（植村ゆかり理事長（66）＝鳥取県米子市）

◇複合競技大会を企画　養護学校の保護者7人が1994年に作業所を開設したのが始まり。▽作業所▽書道、ダンスなど6講座▽福祉の店2店――を展開し障害者約80人が利用する。16年秋で10回目を数えたバリアフリーの水泳・ランニング複合競技「全日本Challengedアクアスロン皆生大会」を国内で初めて企画し、事務局として運営を支えてきた。植村さんは「障害者が輝くことを手助けするのが仕事です」と話す。

本紙「受賞者喜びの声」より

寄付総額は1億1483万7897円に

日本陶芸倶楽部会員チャリティー作品発表展

陶芸の振興と普及を目的に多くのアマチュア陶芸家が集う日本陶芸倶楽部（児玉裕司理事長、東京都渋谷区）は、毎年、会員の作品を展示即売するチャリティー展を開催し、純益を当事業団などにご寄付いただいています。

16年5月に第49回日本陶芸倶楽部会員チャリティー作品発表展（日本陶芸倶楽部、毎日新聞東京社会事業団など主催、毎日新聞社後援）が、日本橋三越本店（中央区）本館6階の美術特選画廊で開催されました（写真）。

今回はアマチュア陶芸家会員242人から茶わんや皿、花器、置物など440点の独創的な作品が出品されました。

収益金の一部122万8727円は、当事業団の社会福祉事業に寄託され、別に50万円が毎日希望奨学金に寄託されました。

同倶楽部は1968年から毎年、社会福祉への寄託を続けており、今回で総額は1億1483万7897円になりました。毎日希望奨学金への寄託も5年連続となっています。

歳末助け合い　265施設の子どもたちにプレゼント

様々な事情で年末年始も家に帰れず、クリスマスやお正月を施設で迎える子どもたちが増えています。2016年も東日本の265カ所の児童養護施設に、クリスマスプレゼントとしてスポーツ用品や文具・玩具を贈らせていただきました。みなさまの歳末助け合い募金へ の温かいご支援が形になりました。

16年は輪投げ、賢人パズル、おばけカルタなどの木製玩具のほか、サッカーボール、バレーボール、バドミントン、フライングディスク、紙飛行機、ヨーヨー、24色のクレヨン・色鉛筆、お絵かき帳、折り紙など、身体を使ってみんなで遊べるものを選びました。

それぞれの施設から、お礼の手紙や絵、手作りのカードなどをたくさんいただきました。子どもたちが元気にがんばる姿が伝わってくるようなうれしい報告もたくさんありました。

路上生活者・アルコール依存症者らへの支援も

路上生活者の方々にも少しでも温かい年末年始を過ごしていただけるよう、歳末支援を継続しています。東京都台東区の山谷地区で、ホームレスの人たちに宿泊施設を斡旋している「自立支援センター　ふるさとの会」、弁当や日用品を廉価で提供する「山谷兄弟の家伝道所　まりや食堂」、ホスピスケア施設を運営する「きぼうのいえ」、無料診療や炊き出しなどを行う「山友会」、宿泊支援・訪問看護事業を行う「友愛会」、横浜市でアルコール依存症からの脱却・自立を支援している「市民の会　寿アルク」の各団体に助成を続けてきましたが、2016年末には、墨田公園で野宿者や生活困窮者に無料の健康・生活相談や炊き出しを行う「隅田川医療相談会」を加え、7団体へ助成金を贈呈しました。

感謝の気持ち　母の日・父の日募金キャンペーン

2005年の初夏、毎日新聞の生活家庭面に「贈り物をしたくても母がもういない」「母の日にカーネーションを見るのがつらい」など、親を亡くして悲しむ読者からの投稿が寄せられました。これを機に、毎日新聞社とあしなが育英会が、母の日・父の日をあらためて家族を思うきっかけとすることを提案し、親への感謝の気持ちを、困難を生きる子どもたちへの支援に変える募金制度を立ち上げました。

07年以降は「母の日・父の日募金キャンペーン」として、遺児の進学を支援するあしなが育英会への寄付だけでなく、児童養護施設の子どもたちへの支援を継続しています。

2016年度も8月末までで東京・大阪・西部の3社会事業団に113件194万6892円が寄せられました。(うち東京には55件99万3992円)　「あしなが育英会」に半額を、残り半額を以下の児童養護団体に贈呈しました。◇NPO法人「交通遺児等を支援する会」「日向ぼっこ」「ブリッジフォースマイル」「青少年の自立を支える福岡の会」◇社会福祉法人「カリヨン子どもセンター」◇CVV(社会的養護の当事者支援団体)＝順不同

母・父の日に募金を

大黒柱失った家庭 苦しく

その他の主催・後援事業

当事業団は、2016年も社会福祉のさまざまな分野で活動しました。ここまでご紹介した以外の主な主催事業・後援助成事業は次の通りです。

■主催事業

◇全国盲学校弁論大会
◇「声の点字毎日」の製作、寄贈

■後援・助成事業

【東京ヘレン・ケラー協会への助成】

◇点字図書館事業への助成
◇ヘレン・ケラー学院事業への助成
◇東京ヘレン・ケラー協会本部への助成
◇ヘレン・ケラー記念音楽コンクールへの助成
◇海外盲人交流事業への助成

【児童福祉事業】

◇交通遺児等を支援する会への助成
◇東京都児童福祉施設競技大会江戸っ子杯の後援と参加賞贈呈

江戸っ子杯野球大会

◇「ボランティアグループおもいつき」への助成（16年度から）

【障害者福祉事業】

◇療育ねっとわーく川崎への助成
◇肢体不自由児・者の美術展の後援と助成
◇国際視覚障害者囲碁大会への協賛と助成（16年度から）
◇わたぼうし音楽祭の後援と助成
◇全国盲学校野球大会の後援と助成
◇関東聾学校体育連盟行事の後援と賞品贈呈

関東聾学校卓球大会

◇日本車椅子バスケットボール選手権大会の後援と助成
◇日本ブラインドテニス大会の後援と助成
◇「心の輪を広げる障害者理解促進事業」の後援と賞品贈呈
◇日本点字図書館のチャリティー映画会の後援と助成
◇中途失聴者・難聴者のための読話学習への助成
◇「わらじの会」夏合宿への助成
◇全東京ろう社会人軟式野球TDリーグの後援と賞品贈呈
◇全日本ろう社会人軟式野球選手権大会の後援と賞品贈呈
◇朗読録音奉仕者感謝行事（鉄道弘済会主催）の後援
◇東京都盲人福祉大会の後援
◇点字毎日文化賞の後援
◇高木記念山中キャンプの後援

【その他の社会福祉事業】

◇地域医療研究・実習への助成
・東京慈恵会医科大学疫学研究会
・慶應義塾大学医事振興会
・東京女子医科大学地域保健研究会
・松本歯科大学地域医療研究会
◇自殺防止電話相談事業「いのちの電話」への助成
◇青少年健康センター・クリニック絆への助成
◇子どもの虐待防止センターへの助成
◇福祉囲碁東京大会の協賛と参加賞贈呈
◇高齢社会に生きるボランティア講座への助成
◇アジア社会福祉従事者研修修了生助成事業への助成。　など

チャリティー書展寄託

一般財団法人毎日書道会は毎年1月の「毎日チャリティー書展」の収益金を当事業団に寄託しています。

1985年から続く同書展ですが、17年も1月5～11日に東京銀座画廊・美術館で開催され、毎日書道会の役員や全国の役員書家の作品が展示・販売されました。

これまでの寄託総額は6003万3000円となっています。

また同会所属の書家の皆さんには、それぞれの地元でも様々な形で当事業団への寄託にご協力をいただいています。

ボランティアグループ おもいつき

私たちは児童養護施設に暮らす子どもたちを、夏の宿泊臨海行事へ連れて行く事業を行っております。対象は乳児から小学3年生で、海水浴やスイカ割りや花火、キャンプファイヤーなど、さまざまなイベントを用意しています。

様々な方からご協力をいただきまして、これまで60年以上続けてまいることができました。これからも、小さい頃の思い出は生きる力へつながると信じ、活動を続けていく所存です。　会長　有浦　瑛人

ご寄付の方法について

社会福祉寄金、海外難民救援金、小児がん征圧募金は年間を通して受けています。当事業団へのご寄付の方法は以下の通りです。

●郵便局でのお振り込み

郵便局に備え付けの払込取扱票（振替用紙）に金額、住所・氏名などの必要事項をご記入のうえ、お振り込みください。送料無料の払込取扱票（振替用紙）をご希望の方は当事業団にご請求ください。

【口座番号】00120-0-76498
【加入者（送り先）】毎日新聞東京社会事業団

※「寄付名」を通信欄に必ずお書きください。
※金額とお名前を毎日新聞の地域面に掲載させていただきます。匿名を希望される方は通信欄に「匿名」とお書きください。

●現金書留でも受け付けています。

●お問い合わせ先

毎日新聞東京社会事業団
〒100-8051 東京都千代田区一ツ橋1-1-1
電話＝03-3213-2674
FAX＝03-3213-6744
E-Mail＝mai-swf@fine.ocn.ne.jp
ホームページ＝http://www.mainichi.co.jp/shakaijigyo/

書き損じのハガキ・未使用の切手を寄付してください

宛名を間違えたりして使えなくなったハガキやあまった年賀ハガキ、引き出しに眠ったままの未使用の切手を寄付してください。書き損じのハガキや未使用の切手は、郵便局で手数料を差し引いて、新しいハガキや切手に交換してもらいます。毎日新聞東京社会事業団では、通信用として使わせていただきますが、通信費が節約できた分を社会福祉事業に活用させていただきます。

個人情報について

当事業団へのご寄付に際して、知り得た皆様の個人情報は、当事業団からの領収証、お知らせなどの送付や問い合わせなどに使用させていただきます。それ以外には承諾なしに使用いたしません。